

## 堀兼道・堀兼の井・七曲井(狭山市)

この道路は古代の入間路とも呼ばれた鎌倉街道上道の枝道である堀兼道の跡らしい/所沢～高萩を往来するルート/右手は堀兼神社

[video](#)



堀兼神社/正面の鳥居は境内にあった樺を使用して造立したものと云う



説明板

当神社には、古来より鳥居がありました。

慶安三年（一六五〇年）川越城主、松平伊豆守信綱の命により、長谷川源右衛門が、社殿建立の折に再建されたと想われます。

寛政五年（一七九四年）十月十八日、名主・組頭等により、改築されました。

後、昭和二十八年（一九五三年）一月十八日、当時の、総代・有志・地元大工により、改築奉納をされ神域の門として、参拝者を見守ってまいりましたが、経済成長に伴う環境の変化（道路の嵩上げ・酸性雨等）により、短年にて傷みがひどく、この度、氏子会員を始めとして、多くの皆様の、奉賛を賜り、境内の檜を使用して改築をいたしました。

尚、額は堀兼神社の本宮である、北口本宮富士浅間神社（富士吉田市）上文司厚宮司の謹書を基に制作いたしました。

平成二十一年十一月二十三日

堀兼神社社務所



これは隨身門/江戸時代後期には存在していたとされる/狭山市指定文化財

[video](#)



# 隨身門及び二神像

市指定文化財 建造物

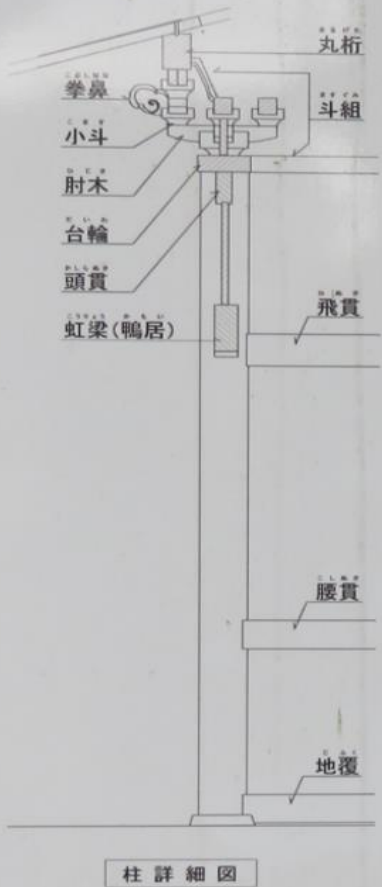
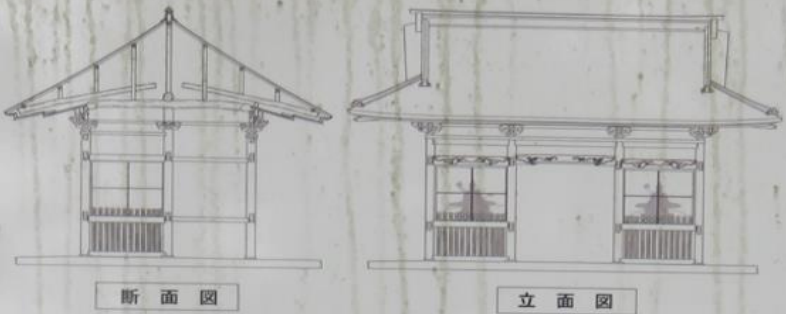
所在地 狭山市大字堀兼三二二〇 堀兼神社  
 指定年月日 昭和六十一年十一月一日

この隨身門は市内唯一のもので、創建は不詳ですが、万延元年（一八六〇）に神像を塗替えたとする記録があるので、江戸時代後期には既に存在していたと考えられます。

建物は桁行六・八五メートル、梁行四・二二メートルで、単層入母屋造りの八脚門です。屋根は当初草葺でしたが、大正十四年に銅板葺に改造されました。その際に斗組と屋根化粧材は新材に替えましたが、柱、地覆、腰貫、頭貫、台輪、丸桁は当初材を伝えています。

隨身とは、平安時代以降に上皇や貴族が外出するときには武装して警護にあたった人のことです。日本の神道においては、神を守る者として安置されており、随神とも書かれます。

この二神像は、向かって左側が豊磐間戸命・右側が奇（櫛）磐間戸命で、俗に矢大神、左大神と呼ばれています。



平成二十七年二月



狭山市教育委員会  
 狭山市文化財保護審議会



右手の奇(櫛)磐間戸命/俗称は左大神





左手の豊磐間戸命/俗称は矢大神





この塚(富士塚であったようだ)の上に社殿が鎮座する



これが堀兼神社社殿/元々は浅間社だったらしい





堀兼神社(富士浅間社)本殿厨子 附 棟札一枚 市指定文化財 工芸品

所在地 狭山市大字堀兼二二〇番地一 堀兼神社  
指定年月日 平成二十九年二月一日

堀兼神社が建つ地は、古の井戸「ほりかね井」の所在地の一つと伝えられていたが、江戸時代にはその井戸はほとんど埋まっていた。これを知った川越奉行の長谷川源右衛門は、慶安三年(一六五〇)に新田開発された堀金(兼)村の誕生に合わせ、井戸を掘り返し、さらに自ら願主となって浅間宮を建立しました。それから二十八年後の延宝六年(一六七八)、荒廃が進んだ浅間宮は川越城内三芳山廣福寺の僧・憲海と地元の人々により再建されました。その時に本殿に納められたのが現在の厨子で、「延寶六年」という棟札の記述からその事実が判明しました。

本殿厨子は木造、黒漆塗りで、高さ二八六・八cm、奥行き一〇九・五cm、肩幅二一六・八cmの一間社入母屋造りで、唐破風の向拝が付き、屋根は彫刻で瓦葺屋根風に見えます。左右の扉と隅柱の間には、向かつて右に昇り龍、左に降り龍、梁の上部には鳳凰が彫られ、木鼻には正面に獅子、側面手前に猿、奥に象の彫刻があります。これらの彫刻は全面金箔押で、部分的に残る顔料から、建立当初は鮮やかであったと思われます。



平成二十九年八月



境内社





石段の下の隨身門を見たところ



別の角度から社殿のある塚を見上げたところ

[video](#)



その右手にあった境内社の日枝神社/これは覆屋



これが日枝神社の社殿



立派な彫刻が施されている



堀兼神社についての説明板

堀兼神社

所在地 狭山市大字堀兼二二二一

堀兼神社の祭神は木花咲耶姫命で、合祀神として大山咋命ほか五神を祀る。社伝によると、景行天皇の四十年に日本武尊が東北のえぞ征伐の帰途この地に立ち寄ったところ、土地の入々が早害に苦しんでいるのを見て、富士山に祈願したら、たちまち清水が湧きたした。そこで土地の人がこのゆかりの地に浅間神社を創建したのが始まりという。

その後、江戸時代に至って慶安三年（一六五〇）、川越城主松平伊豆守信綱が深くこの神社を崇敬し、家臣の長谷川源衛門に命じて社殿を再建させた。明治維新後は「堀兼井浅間社」と称していたが、明治五年に村社となり、同四十年から同四十二年にかけて村内の神社十二社を合祀し、社名を現在のものに改称した。

境内にある「堀兼の井」は武蔵野の高燥台地の飲料水井戸として古くから有名であり、県指定旧跡。また、バラモミは県の天然記念物に指定されている。なお、堀兼神社の社叢は、昭和五十八年にふるさと埼玉の緑を守る条例に基づき「ふるさと森」の指定を受けている。

昭和六十年三月

埼玉県狭山市

舞殿(神楽殿)か・・・



こちらにも境内社/左手奥に説明板が見える







街道を往来する旅人の便を図るために掘られたとされる、平安時代まで遡るといふ井戸跡/堀兼は掘り難かったという意味らしい

# 堀ほり兼かねの井い

県指定文化財 旧跡

所在地 狭山市堀兼二二二〇 堀兼神社  
指定年月日 昭和三十六年九月一日

武蔵野の堀兼の井もあるものをうれしく水の近づきにけり(千載集、藤原俊成「一四一四」一〇四)という歌にもあるように、堀兼の井は古くから書物に現われ非常に有名なものです。しかし、武蔵野には、数多くの「堀兼井」と称されるものがあつたと推定され、この堀兼神社境内にある「堀兼の井」が古くから言われている「堀兼の井」かどうかはわかりません。しかし、江戸時代から史跡として知られた場所であつたことは間違いなく、宝永戊子年(一七〇八)の「堀兼井碑」や、天保十三年(一八四〇)の碑も現存しています。

この井の形態や使用法は入曾の七曲井と同様と考えられ、昔は重要な役割を持っていたと思われまます。

藤原俊成の歌のほかにつきのような歌もみられます。

「あさからす思へはこそはほのめかせ

堀金の井のつつましき身を

俊頼集 源 俊頼(一〇五五〜一一二九)

「くみてしる人もありなん自づから

堀兼の井のそここのころを

山家集 西行法師(一一一八〜一一九〇)

「いまやわれ浅き心をわすれみす

いつ堀兼の井筒なるらん

拾玉集 慈円(一一五五〜一二二五)



平成二年三月



埼玉県教育委員会  
狭山市教育委員会

これは「堀兼井詩碑」/天保13年(1842年)に堀金(兼)村名主の宮沢氏が造立させたもので、清原宣明の漢詩が刻まれているらしい



これが堀兼の井

 video



中央に四角い石組みの井桁部分が見て取れる



こちらは「井磧の碑」/宝永5年(1708年)3月に川越藩主の秋元喬知が家臣の岩田彦助に命じて造立させたもの



境内にある御神木



さて、こちらには七曲井という漏斗状井戸の遺構がある





「七曲井」と刻まれた石碑



ここが七曲井/説明板が立っている

[video](#)



# 七曲井

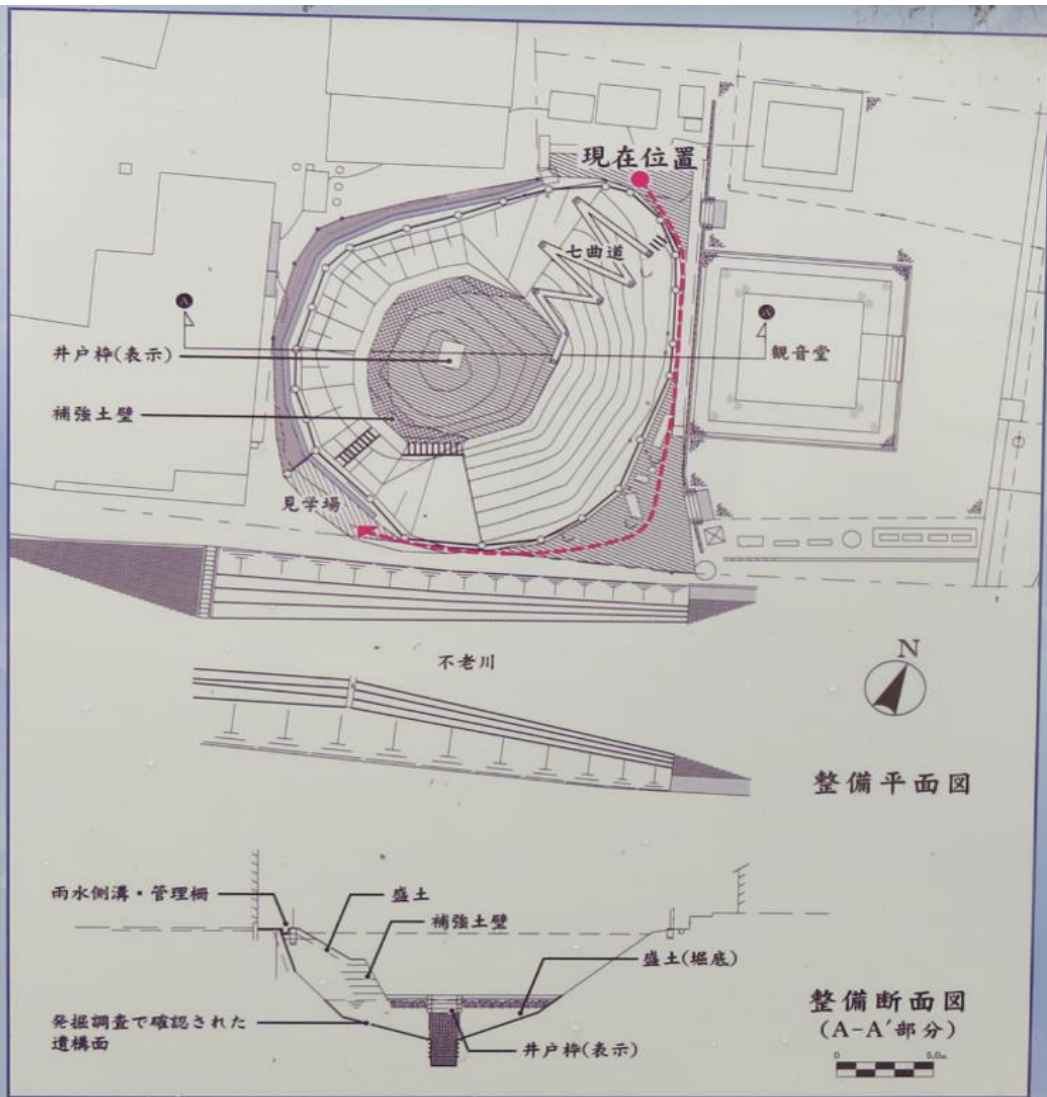
## 埼玉県指定史跡

所在地 狭山市北入曾13366  
指定年月日 昭和24年2月22日

飲料水を得ることが困難な武蔵野台地では、豎掘り(たてほり)井戸を掘る技術が発達する近世まで、漏斗状(ろうとじょう)に掘り下げて井戸を作りました。

このような井戸の一つが七曲井(ななまがりのい)で、平安時代中頃に掘られたと考えられます。残された古文書から江戸時代まで使われていたことがわかっていきます。昭和45年に発掘調査が行われ復元されましたが、平成15年の調査で井戸内にあった石壁に崩落の危険性があることが明らかになりました。そのため、平成17・18年度に崩落防止工事を実施しました。

こちらから見えるのは、工事により積上げられた盛土です。そのため、本来の姿とは異なっています。また、道は復元してありますが、下部の回り道は湧水を防ぐ目的で埋めたため、現在は見えなくなっています。反対側の見学スペースでは、本来の井戸の法面(のりめん)がご覧になれます。案内図の位置に移動してご覧ください。



埼玉県教育委員会  
狭山市教育委員会



反対側にも説明板があった/こちらから見た法面が本来の姿らしい



# 七曲井

なな まがりのい  
埼玉県指定文化財 史跡

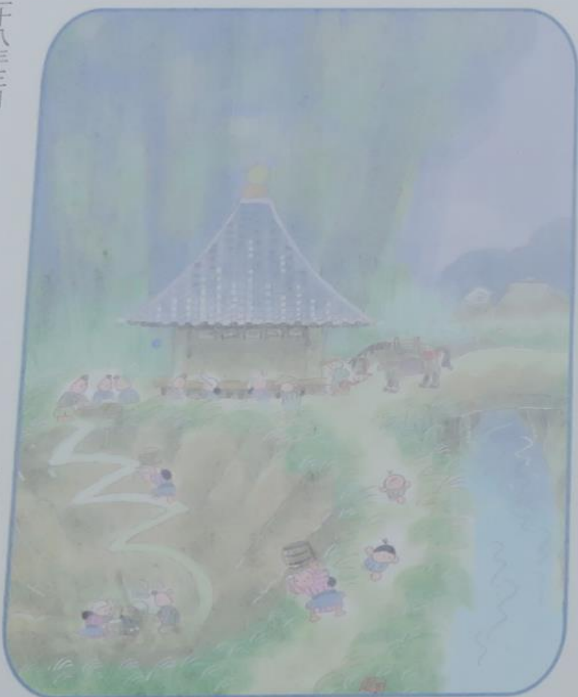
所在地 狭山市北入曾一三六六  
指定年月日 昭和二十四年二月二十二日

この七曲井は、周囲七十m余り、直径二十六m、深さ十一・五mという大規模な漏斗状（ろうとうじょう）井戸です。

堅掘り（たてほり）井戸を掘る技術が確立される近世までは、この井戸のように漏斗状に地下水まで掘り下げたと考えられます。井戸に降りる道は上部で階段状をなし、中央部では曲がり道、そして底近くでは回り道となっており、この道の形状が名前の由来となっているといわれています。井筒部は人頭大の石で周囲を囲った中に松材で井桁が組んでありました。井戸所在地の小字名「堀難井」、読みは「ほりかねい」、あるいは「ほりがたい」から、古来この地方に住む人々にとって飲料水を得ることが困難であったことがわかります。

井戸が掘られた時代については、建仁二年（一一〇二）との説がありますが、確かではありません。ただ、府中から入間川に至る奈良・平安時代の古道沿いにあるため、平安中期に開拓と交通の便を図るため武蔵国府（現在の役所）の手により掘られたと考えられています。

七曲井は、何度か改修が行われ、地域の人々の貴重な水源として活用されてきましたが、宝暦九年（一七五九）の改修を最後に歴史から姿を消します。その後、土砂やゴミの堆積によって埋もれてしまいました。昭和四十五年に埼玉県教育委員会と狭山市教育委員会によって発掘復元され、地元の人々の努力により大切に保存されてきましたが、近年になって壁の一部に崩落の危険性があることが明らかになりました。そのため、平成十七・十八年に崩落防止工事を実施しました。この工事により、現在見える姿は往時とは異なるものとなってしまいました。井戸本体は半永久的に保存可能となったのです。



童絵：池原 昭治

平成二十八年三月



埼玉県教育委員会  
狭山市教育委員会

これが井戸枠/本来の位置より嵩上げされている



傍には不老川が流れる





これは傍に建つ常泉寺観音堂



じょうせんじ  
常泉寺の観音堂

所在地 狭山市大字北入曾

観音堂の創立は、建仁二年(十二〇二)と言ひ伝えられている。

その後文保二年(一一三二)の旱魃かんばつの際に、村人が観世音に祈り古井をさらったところ、たちまち水が吹き出したと伝えられる。

本尊は、木造聖観世音菩薩坐像で、江戸時代後期の川越住仏師大覚の作であり、堂宇は宝永五年(一七〇八)の再建である。

毎年一月十一日の観音様のお祭りには、かつては、五色の布や鈴、新しい鞍や腹掛けをつけた牛馬が、お堂のまわりを回り、賑やかな祭りだったと言われている。

とし  
不老川がわ

この川は、入間市宮寺付近に源を発し、野水を集めながら堀兼を通り、川越市で新河岸川に注いでいる。

地質的には、古多摩川の名残り川であるといわれている。

現在では、一年中水が流れているが、昔は、毎年冬期になると必ず水が涸れか「としとらず川」と言われ、「節分の夜、不老川の橋の下にいと年をとらない」との伝説がある。

昭和六十一年三月

埼玉県  
狭山市

# 木造聖観世音菩薩坐像

市指定文化財 彫刻

所在地 狭山市大字北入曾一三六六 常泉寺観音堂  
指定年月日 昭和六十一年十一月一日

木造聖観世音菩薩坐像は、常泉寺所属の観音堂の本尊として祀られているものです。その昔、大干ばつがあり、水に困った人々が観世音菩薩に祈って七曲井をさらったところ、たちまち清水が湧きだしたという故事があり、観世音菩薩は七曲井の守り菩薩となり、今も崇敬されています。なお、常泉寺も元はこの地にありましたが、元禄二年（一六八九）に観音堂を残し現在地に移転したと記録に残っています。

この像の正確な制作時期はわかりませんが、台座裏の墨書きに「川越彫佛師 大覚 現住 隆寛代」と記されており、隆寛は常泉寺の住職で、安永五年（一七七六）ごろから没年の文政二年（一八一九）まで寺に勤めていたため、その期間に川越の彫佛師である大覚という人物によって作られたと考えられています。



像容は、頭上に宝冠を戴き左手で未開蓮華を持ち、右手をあげています。宝冠は鍍金の透かし彫り金具です。顔立ちは端正で、端座の足を被う裳裾のひだもよく捉え、全体に均整がとれています。

平成二十七年二月



狭山市教育委員会  
狭山市文化財保護審議会

他にも様々な石造物があった



さて、こちらはすぐ隣に所在する入間野神社



「村社 入間野神社」と刻まれた標柱と説明板が立っている



# 入間野神社

所在地 狭山市大字南入曾六四一

入間野神社の主祭神は大山祇命と木花咲耶姫命で、合祀神として天照大神ほか六神を祀っている。

社伝によると、当社は建久二年（一一九一）の創建と伝えられ、石造の御神体には天正六年（一五七八）の年号が刻まれている。旧号を国井神社、後に御岳大権現と称し、社領として慶安二年（一六四九）に十石の御朱印を賜わっている。

明治元年の社号改正につき、御岳神社と改称したが、明治四十四年に大字水野にあった浅間神社を合祀し、現在の名称となった。大祭は毎年四月十五日、十月十五日、十一月二十三日に行われるが、特に十月十五日には県指定文化財の「入曾の獅子舞」が奉納される。当社には宝暦八年（一七五八）の獅子舞の絵馬があるので、それ以前から伝承されているものと思われる。

昭和六十年三月

埼玉県  
狭山市

こちらにも「埼玉県指定無形民俗文化財 入曽の獅子舞」と刻まれた標柱と、その説明板が立っていた





# 入曾いりその獅子舞ししまい

埼玉県指定文化財 無形民俗文化財

所在地 狭山市南入曾 四六〇一 金剛院  
六四一 入間野神社

指定年月日 昭和五十四年三月二十七日

入曾の獅子舞は、埼玉県西部地方を代表とする郷土芸能として、毎年十月第三土曜日・日曜日に行われ、南入曾の金剛院と入間野神社に奉納されます。その理由は入間野神社はかつて御嶽権現（みたけごんげん）と称していましたが、金剛院はその別当寺（べつとうじ） 神仏分離以前に神社に設けられた寺院）だったためで、土曜日は金剛院で揃獅子（そろいじし）が行われ、日曜日には本獅子（ほんじし）が入間野神社に奉納されます。これは、神仏混淆（こんこう）であったころの名残といえます。

この獅子舞の歴史は古く、入間野神社所蔵の獅子舞を描いた奉納絵馬には「宝暦八年（二七五八）九月当村中」とあるので、その起源は少なくとも江戸時代中期までさかのぼることができます。また、天狗が持つ軍配には「風雨和順五穀成就」とあり、かつては豊作を願って村内を舞って歩き、日照り続きのときは雨乞いや悪疫退散を祈願して舞ったこともあるといわれています。

獅子舞の構成は、獅子役三人、天狗（はいおい）一人、棒使い二人、花笠（ささら）四人で、これに笛役八人、唄役六人、ほら貝一人が加わります。舞は勇壮で、「前狂い」と「後狂い」があり、前狂いは、いりは（入庭）、ごろしち、まわり狂い、竿がかり、まわり狂い、花吸い、まわり狂い、唄、ひきは（引庭）の順で、後狂いは、みつっぱね、まわり狂い、唄、けんか、ひきはの順で舞います。

平成二十八年三月





これが入間野神社社殿

[video](#)









鯉木と千木が一寸貧弱...



### 入間野神社の神様・道真公は弓の名人

菅原道真公（すがわらみちざねこう）は、幼少の頃より学問の才能を発揮され、わずか5歳で和歌を詠（よ）まれるなど、神童と称されました。道真公は、さらに勉学に励み、学者としての最高位であった文章博士（もんじょうはかせ）となり、栄進を続けられました。学問だけでなく、弓にて百発百中の腕前を披露するなど、文武両面に傑出した人物でした。



学問に親しみ、誠を尽くされた天神さま。

真面目でひたむきなそのお人柄は、日本人のあるべき姿として共感され、篤い信仰を集めてきました。また江戸時代には子供たちが学ぶ寺子屋の普及と共に、「学問の神様」である天神さまは、人々の間で「子供の守り神」として慕われるようになりました。今日でも、初節句のお祝いに天神人形を贈り、子供の無事成長と将来の学業上達を願う風習を残す地域もあります。

京都から讃岐国（さぬきのくに：現在の香川県）として赴任された際、傾いていた国を建て直し住民に大変慕われました。その実績が宇多天皇に認められ、京都に戻り厚い信任を受け、ますます政治の中心でご活躍されました。寛平6年（894年）、唐の国情不安と衰退を理由に遣唐使停止を建議され、後の国風文化の開花に大きな影響を与えました。その後、右大臣に任じられ、国家の発展に尽くされていましたが、左大臣 藤原時平の政略により、身に覚えのない罪によって、大宰府に突如左遷（させん）されることとなりました。

全国の天満宮では牛の像をよく見かけますが、「菅原道真公が丑年の生まれである」、「亡くなったのが丑の月の丑の日である」、「道真は牛に乗り大宰府へ下った」、「牛が刺客から道真を守った」、「道真の墓所（太宰府天満宮）の位置は牛が決めた」等多くの説がありどこまでが真実なのかは、今となってはよくわからないそうです。





こちらは入間招魂社



入間尋常高等小学校(現・入間小学校)の旧御真影奉安殿(昭和15年建立)を移築したものらしい

## 入間招魂社

(いるましようこんしゃ)

日清戦争(一八九四)より大東亜戦争(一九四一)に至るまで、この地から多数の青壮年が出征され、祖国のため勇敢に戦い殉国されました。

生命を捧げられた百六十四柱を、昭和二十五年(一九五〇)四月十五日、旧入間村は戦後に解体保管されていた奉安殿を入間招魂社として復元、ここに御祀りしました。

時代は変わり行くとも平和の礎として、国の安穏と御魂の安らかなる鎮座を、永遠に祈念するものである。

令和元年十月

入間奉賛会  
入間遺族会

手前の大通りには、こんな分かり易い鎌倉街道上道の案内板が立っていた

# 鎌倉街道(上道)のみちすじ

鎌倉街道(上道)は、源頼朝が建久3年(西暦1192)鎌倉に幕府を開いてから、天正18年(西暦1590年)後北条氏が滅びるまでの約400年間、主要な道路としての役割を果たしてきました。

幕府成立とともに整備された中世の道といわれ、武威武士を代表する畠山重忠をはじめ、新田義貞等名将たちが、栄枯盛衰の物語を刻みつけた道で、県の歴史に大きな影響を及ぼしております。

さらにこの道は鎌倉から関東諸国へ、あるいは遠く信濃(長野県)、越後(新潟県)方面に通じ、兵士や軍馬の通った道であり、また諸国の武士たちが鎌倉へ参集するために利用された、政治的、軍事的機能をもつ道でありました。



## 参考ホームページ

<https://www.city.sayama.saitama.jp/manabu/dentou/siteibunkazai/horiganenoi.html>

<http://tosyokan-bicycle.cocolog-nifty.com/blog/2018/02/post-a663.html>

<https://www.ensenji.or.jp/blog/1221/>

<https://blog.goo.ne.jp/ihirot/e/2407185bd6ec53e1154163befa887da2>

[https://tesshow.jp/saitama/sayamairuma/sight\\_horikane.html](https://tesshow.jp/saitama/sayamairuma/sight_horikane.html)

<https://www.city.sayama.saitama.jp/manabu/dentou/siteibunkazai/nanamagari.html>

<https://blog.goo.ne.jp/ihirot/e/e1d002558a8cb48a36c98679c8da0af8>

[https://tesshow.jp/saitama/sayamairuma/sight\\_iriso\\_nana.html](https://tesshow.jp/saitama/sayamairuma/sight_iriso_nana.html)

<http://www.eniguma49.sakura.ne.jp/kaidou.syukuba/kamakurakaidoukamimiti/sayamakamakurakaidu/sayamakamakurakaidu.html>



